城東

●城東地区●
1905世帯
男1797人
女1919人
合計3716人
H29.7.1現在

防災部視察研修に参加して

前日の激しい雨が嘘のようないいお天気の中、5月27日城東地区防災部の視察研修に参加しました。

今回の目的地は、長野県北部地震の被災地である栄村。2011年3月12日未明に発生した震度6強の場所です。前日の未曾有の東日本大震災の影に隠れてあまり注目はされませんでした。

震災復興祈念館

栄村震災復興祈念館で、実際に被災された月岡館長の説明を聞きました。一日前の東北のテレビ放映を見ていたので、栄村の大地震は日本列島沈没の印象を持つ程の恐怖だったそうです。被災から6年が過ぎ、既に災害の傷跡は写真の中だけとなっています。

豪雪地帯にも関わらず、当時は雪解けが早く、あまり雪が屋根に残っていなかったことが、家屋数の8割位の被害が出たにも関わらず幸いしたそうです。

震災復興祈念館

当時、頻繁に起こる地震に備えて、家具の固定など、住民の防災意識が高かったこともあり、地震の直接の被害による死者は無く、軽傷者が10名程出ただけでした。

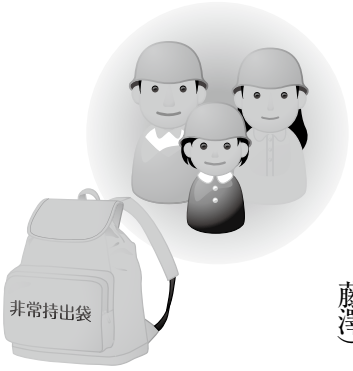
安否確認もご近所さん全員の動向が分かる人付き合いの地域柄で、避難所の開設及び運営もスムーズに行われ、たまたま近隣の市町村に被害が無く、救援物資も食料も早い段階で届けられたそうです。

防災訓練と防災意識の持ち方、住民同士の日頃のお付き合いが、いざ大地震発生時に結果に出ると痛感しました。

次に、震災後栄村公民館につくられた歴史文化館「こらっせ」を見学、震災で壊れた土蔵にあった江戸時代からの民具、食器具などの展示を見学しました。古文書なども展示されていて善光寺地震の際の様子も知る事が出来ました。

被災からの復興、更にそれをバネにして先へ進むエネルギーを感じた一日でした。

（城東地区防災部副部長　藤澤）



人権啓発推進協議会視察研修に参加して

6月14日、天候にも恵まれ、戦争遺跡「松代象山地下壕」の他、「真田宝物館」、「真田邸」、「文武学校」の研修に21名が参加しました。

ガイドの説明によると、地下壕は、第二次世界大戦の末期、軍部が本土最後の拠点として着工。昭和19年11月～昭和20年8月15日までの約9カ月の突貫工事をもって約8割が完成しました。説明を受けながら奥の方へと進みました。見学コースは片道500メートルで、中に入って行くと少し冷えました。そして異様な思いがしました。気のせいでしょうか？

地下壕は舞鶴山、皆神山、象山に碁盤の目のように掘り抜かれその延長は10キロメートル余りあり、とても固い岩盤地帯です。

地下壕入口にて

建設には当時の金額で約2億円、労働者の多くは朝鮮や日本の人々が強制的に動員されたとも言われています。

また、この壕は固い岩盤なので10トン爆弾にも耐えるそうです。地下壕は当時の状態のままで保存され、風化等で崩れやすくなっている所もあり注意して進むようにとガイドさんより指示がありました。注意しながら進んでいくと、岩に刺さったままの削岩用ロッド・岩に残る削岩用ロッド痕、ずり（岩をくだいた物）を運んだトロッコの枕木跡があります。

ずりの使用先は環状7号線・8号線等にも使用したそうです。

地下壕内部の様子

（裏面に続く）

工事は一日2交替～3交替で進められ、また、食糧事情も悪く工法も旧式な人海作戦を強いられ、犠牲者も多く出たそうです。総延長5，853．6m。概算掘削土量59，635㎥、床面積23，404㎡。この数字は聞いただけでも気の遠くなるような数字です。

この作業にあたった人々はどんなだったか想像を絶し、9カ月もの期間本当に大変だったと思いました。

真田宝物館

宝物館には真田家22代当主に譲られた調度品・書画・文書等々が展示されていました。松代藩真田家の歴史と大名道具は目を見張るものが多くありました。

真田宝物館

真田邸

真田邸は、江戸時代には新御殿と呼ばれ御殿建築を知る貴重な屋敷です。1862年、14代将軍・徳川家茂の時代に行われた文久の改革で、参勤交代制度が緩和されたことにともない、妻子の帰国が許可され、松代にも屋敷が必要になりました。後に松代城の「附」として国の史跡指定を受けました。

文武学校

藩士の子弟の学問、武芸を奨励するため8代藩主真田幸貫は松代藩士・佐久間象山の意見を受け蘭学・西洋砲術を取り入れた文学所・御役所・教室は2棟、剣術所、柔術所、弓術所、槍術所が造られ、8歳～14歳まで文芸、15歳～35歳位までは武芸を習った。明治4年には西洋文学士官学校がつくられ、昭和28年には国の史跡に指定されました。

文武学校

今回の視察研修は意義深いものがありました。（鷹巣）

城東地区体育協会 住民主体の体育活動の思い出

～障害を乗り越えて～

平成4年秋、第31回城東地区球技大会（野球、バレー、卓球、ゲートボールの四種目）が旭町中学校グランドを主会場に開催されました。

以前は、松本市民体育祭出場権を得るためのチーム作りが主目的で、選手枠も絞られていたが、本大会から役員の交代を機に、従来の地区球技大会参加資格の基準を変え、住民の「健康」「体力」「仲間」作りを鮮明に打ち出し、参加球技種目は役員皆で決め、選手枠の制限も取り払い、中・高校生・お年寄りまで地区住民挙げて参加可能な大会としました。

この大会で一人の若人に生きる希望を与えた感動的な出会いがあり、いまだ言い伝えられているので、紹介します。

当時、彼（Aさん）は城東地区在住で、歩行に困難をきたし身体に障害（重度）のあった学生でした。友達の背を借りないと登校もできなかったが、子どもの頃から野球が好きで、不自由な足をかばいながらキャッチボールや打撃の練習をしており、一生に一度でいいからユニホームを着て試合で活躍をしたいと夢にまで見ていたようでした。

この話を役員会に諮り、検討した結果、参加を認めることにして本人・家族に伝えました。

試合は相手チームから、Aさんを加えて10名構成とし、試合途中に本人の都合で休んでもよく、再出場もOKとの思いやりの了解を得た。Aさんは右翼で打順は九番で出場しました。

試合は、最終回2死満塁、2点差で相手がリードしていたところ、Aさんの打順となり、夢にまで見た場面が実際に訪れました。

第一球から積極的にバットを振ってみたが、足腰に力が入らずバットに当たらない。観戦に来ていた父親から「無心で打て！」と声がかかり、相手投手も感ずることがあってか打ち易い球を投げてきました。

無心に打った球は左中間を抜き、転々と外野へ……。Aさんは気が焦り、足は思うように前に出なかったが25メートルを必死で走りました。

相手外野手は、一塁でアウトになるタイミングだったが、二塁ベースに返球、一塁に転送された時は、間一髪セーフとなり、3点タイムリーとなってサヨナラ逆転勝利となりました。

相手センターの思いやりの気持ちがAさんを走らせたものと思われました。

この年、松本市民体育祭に出場した城東地区は、野球で優勝し、女子バレー・卓球・ゲートボールの部はそれぞれ準優勝で総合「準優勝」の栄冠を得ることができました。

全員で盛大な慰労会をしたのは当然でした。

Aさんはこの野球を通して、仲間や相手チーム、家族や応援団の人達が自分のために温かく見守ってくれたことに感謝し、その恩に応えようと自ら決意して、前後5回に及ぶ障害のあった足の手術を実施し、自分の力で歩くことができるようになりました。

その後2年間、専門学校に通いプロのカメラマンとして自立、現在も社会人として活躍しています。

住民主体の体育活動を積極的に展開した思い出の球技大会でした。（衣川）